

編集後記

『エジプト学研究』18号をお届けします。毎年、1冊ずつ刊行していき、今年で18号目を数える。一度に18冊もの出版物を作成することは困難なことであるが、18年間の積み重ねが、当たり前の話ではあるが18冊の成果物を生み出したのである。このひとつずつ継続していくことが学問・研究では不可欠な要素となっているのだ。言うことは簡単であるが、実際に一段一段と階段を踏みしめながら昇っていくことは、根気と努力が必要である。

私たちのエジプトでの調査・研究も同様のことが言えるであろう。吉村先生が、ナイル川流域のジェネラル・サーベイをおこなってから今年で46年目を迎える。マルカタ南遺跡の第1次発掘調査からでも41年目となる。毎年継続しておこなうこと、これが実は大変に難しいことである。20年以上前に滞在していた英国の大学で、「Step by step」という言葉で先生から励まされていた。少しずつ、毎日、毎日、地道に努力していけば、必ず成果が出ることを言っていたのであるが、還暦を昨年過ぎたこの歳になっても、この教えを守っているとは言い難い。地道に努力して継続することの大切さを再認識している。

今号は、ルクソール西岸アル＝コーカ地区岩窟墓群の第4次調査とダハシュール北遺跡の第16次・第17次発掘調査、そして、カイロ郊外のギザ台地で実施されている太陽の船プロジェクトに関する調査概報と調査報告が3点、研究ノート1点、卒業論文概要1点、そして2011年度の早稲田大学エジプト学会とエジプト調査の活動報告2点となっている。

今回は、調査報告以外の論文や研究ノートが極めて少なかったことは、非常に残念なことであった。次号からは、多くの研究ノートと論文が投稿されることを切に希望するものである。また本18号から従来の冊子形式を改め、ホームページ上にPDFファイルで公開する、いわゆる電子書籍の形式を採用するようになった。経費の削減を目的としたものであり、読者諸兄のご理解・ご協力を賜れば幸いである。

最後になりましたが、今号の編集には、河合 望、馬場匡浩、矢澤 健、熊崎真司の4名の諸君が主にあたられた。明記して感謝したい。

2012年3月末日
王家の谷・西谷にて

近藤 二郎

早稲田大学文学学術院教授
早稲田大学エジプト学研究所所長